

環境を守りながら、農業に活力を！



出来た、美味しいお米！ 農業の将来を牽引するソーラー米。

9月26日、袋井市木原にある藤城一英さんの田んぼで、同市農政課職員によるソーラーシェアリングの視察が行われた。

ソーラーシェアリングとは、田んぼや畑に設置された太陽光発電のこと。藤城さんの田んぼには、48キロワットの太陽光パネルが並ぶ。その下で重そうにこうべを垂れる稻穂を目についた農政課職員からは、驚嘆の声があがつた。

太陽光パネルによって24・6%遮光された土地で本当に稲は育つのか、理論上は可能とされた企画だったが、実際にその成果を目にするまでは不安や疑念があった。藤城さんの田んぼで今年収穫された米は、量・質ともに、例年に引けをとらない。現場で採取したデータからも、計画的に配置された太陽光パネルにより過剰な日差しが緩和され、高温障害による品質低下を防ぐなど、生育に適した環境が整えられていたと見て取れる。



5月 耕起

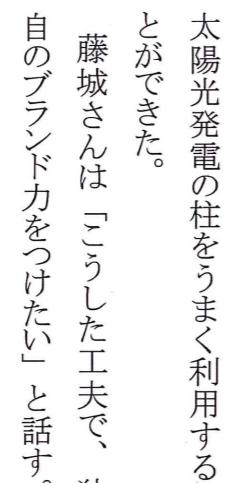


▲ソーラーシェアリング

6月 田植え

▲稻架掛けのようす

7~9月 生育



▲たわわに実った稻穂

10月 収穫



▲9/26 太陽光発電の下でくすく育った稻穂

太陽光発電がもたらす売電という副収入は、農家の間で深刻になっている後継者問題の解決や、新しい農業に取り組むための活力にもなると期待されている。

固定資産税も高く、忙しさの割に利益の薄い農業は若者に敬遠されがちだ。藤城さんも、「田んぼがあると嫁が来ない」と息子さんに言われたそうだ。その息子さんも今回の取り組みには興味を示した。

また、藤城さんは今年初めて稻架(はざ)掛けにも挑戦した。天日干しした米のおいしさはある機械乾燥した米とは一味違うが、手間がかかる作業で、近年ではほとんど見かけなくなった。今回は太陽光発電の柱をうまく利用することができた。

藤城さんは「こうした工夫で、独自のブランド力をつけたい」と話す。

近年、日本農業を取り巻く情勢は混迷を深めるばかりだが、昔も今も目指すべきは競争力のある安全で美味しい食材づくり。今回、ソーラーシェアリングに稻作農業の光を見た。この光が業界を取り巻く混迷を振り払い、日本農業全体を照らす光明となるか、実績が見え始めた取組みに期待が高まっている。